

ASDC(アイカツシステム・ディベロッパーズ・コンソーシアム)所属エンジニア、召苗吾華音は悩んでいた。

ステージプロデュースを頼まれたライブのアイカツシステムの演出。そこで使いたいライブラリ※1のひとつが、現行のシステムに仕様変更の都合対応しておらず、新基準に更新しようと思ったものの随分古く、ソースコード※2を見つけることができなかった。

※1：プログラムに組み込まれるデータの塊、ないし特定の役割の小さなプログラム。

※2：プログラムの元となる、プログラミング言語で記載された構造。これをコンパイルすることで実行構造になる。アイカツシステムには即応用に短いコードのインタープリター機能も備わるが、エラー回避の為ASDCでは非推奨としている。

制作者の名前はT.S、イニシャルの記載しかないが、驚いたことに随分昔のバージョンからその3バイトはアイカツシステムが動く機器上で単体の文字コードとして定義されており、フォント指定されている。

検索語としての入力は可能だが、ソースコードに書いてコンパイルすると本人認証画面が出る。専用のワнтаイムパスルーチンがあるようで、ごく短いデータサイズなもののその部分の解析は別なマシンに読み出しても不可能…と、その名は恐ろしく堅牢に護られている。

それほどの人物であれば、今の自分の立場なら既知な筈で、直接の問い合わせも可能な筈なのだが、この人物に限り通常ソースコードは全て公開されているものの、一切の情報がない。当然面識もない。業界人や同業者に思い当たるイニシャルはいない。そもそも、それほど多くの仕事をこなしたという人物を知らない。組織名だろうか？

一応自分もそれなりの仕事をしてきて、裏方側での知名度はあるつもり。そういう自分が知らない人物。ASDCの先輩方に意を決して尋ねるも、そう歳が離れていない皆は同様に知らず、ベテラン勢は何やら隠し事の気配。

色々勘ぐってしまう。もしや既に故人？いやいや。裏方業界とはいえ貢献度の高い人物に何かあれば、それは業界内に即座に知れ渡る。匿名にする理由を考えると、それはもう山とあるにせよ、だとしたらあの莫大なりソース※3に律儀に名を残すだろうか？

※3：資産・資源。この場合、過去に開発されたプログラムやデータ群のこと。

「うーん…」

「ねえ、吾華音が1から作り直すんじゃ駄目なの？」

アンジェリカが、吾華音用の大きいマグカップになみなみと注がれたミルクココアを仕事用の大型タブレットの横に置き、尋ねる。

「ありがと…時間あるからできなくもないけど、なんだろ、この喉に刺さった魚の小骨的というか、出そうで出ないクシャミ的というか…気になっちゃって」

「でも時計は止まってないから、限度はあるよね？把握してる？」

「直しも計算に入れてあとギリギリ4日くらい…」

吾華音の好みでぬるめの温度で作られたココアをひと口、そしてため息。アンジェリカの表情も少し曇る。

「謎解きだけが理由じゃないよね？」

「うん。次に使われる会場用なんだけど、アイカツシステムの実施例が過去に一度きりなんだ。聞けばレイアウトは一切変わってなくて、ロケーションサンプルを古いシステムで擬似的に動かしてびっくりしたんだけど、それはもう驚くような密度で会場内くまなく採寸してあって。それを当時のまだ性能がよろしくないアイカツシステムで軽量に動くように、どうもギリギリまでコンパクト化したみたいで」

熱っぽく語る吾華音。アンジェリカは片目を瞑って切り返す。

「あ、それは私でもオチが見えたな。採寸時間削れるだけじゃなくて、高速化が期待できる類でしょう」

「ご明察。勿論削る時間なんてないし、あっても私じゃここまでは削れないね」

「でも、ひとつヒントはあるじゃない」

「えっ？」

「実施例ひとつなら、その実施した人に聞けばわかるでしょ？」

「…アン姉頭いいなあ」

ぽかーんとする吾華音の顔に、アンジェリカはやれやれのジェスチャー。

「それに気づかないほどその『誰か』に心奪われてるだけでしょ、もう」

気にもとめずに、急ぎタブレットを操作する吾華音。たちまち情報がデスクに溢れる。

「あれ」

「どうしたの？」

「今回スタライ絡みじゃないからわかんなかったよ。これ、マスカレードのステージ用だ」

「あらあら。最近疎遠にしてたの、織姫さん拗ねてて教えてくれないか

も」

「うっ…その時は意を決してミヤさんに聞くから！」

「へえ、流石だなあ。正体知ってるんだ」

「箝口令案件だからアン姉でも教えないよ？」

「はいはいわかってます。で、織姫さんのアドレスブックの電番もう押しちゃったんだけど」

「はや！」

「誰かさんがやっぱりやめとか言い出してこれ以上時間を無駄にしない配慮」

「ああもうわかってるし！」

悪戯な微笑みのアンジェリカ。吾華音は慌ててワイヤレスヘッドセットを耳につける。社交辞令的なやり取りを経て。

「…ええ。そうです。ってあれ？この時期…一番いい頃というか、電撃引退前あたり…のマスカレードの箱にしちゃ随分狭くないです？」

『そうね、あの時は…シークレットライブというか、食事の美味しいお店で、静かに曲を楽しんでもらうための、言ってみればパーティーみたいなものだったから』

「それでこんな妙な配置なんですね」

『行ってみると印象変わるわよ。今でもあのままなら、だけど』

「で、肝心の当時のスタッフなんですが…」

流れで聞けないか試してみる。しかし。

『本人に確認しないと教えられないわね。一応釘刺しするけど、りんごに聞いても本当に知らないから返答はわからない、な筈よ』

「はあ…そうですか」

流石に学園長、落ち着いた口調で即答する。がっかりを口に出したところにすかさず助け舟が。

『でも、実際に行ってみると何かわかるかもしれないわ。明日はうちの仕事だったわよね？』

「はい、テスト待ちのデータが溜まっちゃってるんで、片付けちゃいます」

『帰りに寄ってはどうかしら？以前星宮がお世話になった、涼川先生のお友達がちょうどソロで入ってるみたいよ？ちょっと待って…』

「花音さんのソロライブかぁ、前売りで埋まってませんか？」

『涼川先生がチケット余分に持ってるそうよ。ちょっと替わるわね』

「えっ…涼川先生！？」

『召苗か、お疲れ。明日の花音のライブ、車回してくれるなら2人ほど他に連れてっても構わないけど、妹でも連れてったらどうだ？明日の午後と明後日オフだから心配ないだろう』

「いいんですか？」

『一応馴染みのハコだから、話聞けるように通しておく。俺は用事あるんで抜けるけど、楽しんでてくれればあいつも喜ぶと思う』

用事あるんで、のあたりで少し複雑顔の吾華音。目を上げるとアンジェリカが自分を指さしている。

(行きたいの?)

小声で吾華音が尋ねると、アンジェリカが笑顔で首を縦に。

「じゃあすいません、新ともう1人、居候先の…ええ、今やってるブランドのデザイナーです、いいですか？」

『ああ。妹の方には今から俺がメールで伝えておく。学園長…』

電話を替わる合間に、アンジェリカに指でOKサインを出してウインク。

「助かりました、手掛かり頑張ってみます」

『あくまで花音さんのライブだということを忘れないようになさいね。仕事も大事だけれど、息抜きもなさい』

「なんだか見透かされちゃってますね…この件でしばらく悩んだもの

で」

『そういう時こそ別なことに目を向けなさい。意外なことに出会えるかもしれないわ。詳しい事は明日』

「はい、失礼します」

ヘッドセットのボタンをクリックし通話を終える。小さな溜め息の後、吾華音の目線がアンジェリカに。

「アン姉、花音さんのファンなの？」

「それもあるけど、そこのお店ビールが超充実しておつまみ美味しいんだって！ほら！」

アンジェリカが目を輝かせながらiPadを差し出す。

「新もいるんだからお酒程々にね？」

「大丈夫！ビールは麦サイダー！それとね、新ちゃんに着てもらいたい服があるから持っていくよ。私は何着てこうかなー」

はしゃぎ気味なアンジェリカに目もくれず、少し表情を曇らせている吾華音。まだタブレット端末のデータを気にしている。

(ここまでオープンソース※4を徹底してくれている人が公開してなくて、あるのはプレビューイメージだけで完成した実行ファイルに至っては出回ってもいない…。織姫学園長も何か隠してる。これ、現場で直接データ貰うしかないかな。断られそうなら、無理矢理にでも。何が起きてたのかさえわかれば、オペレーターの枝を掴める筈…)

考え込む様子の吾華音の顔を見て、おもむろにタブレットのスリープボタンを押すアンジェリカ。

「明日まで進まない事に気を巡らせるなんて無駄無駄！今日は休もう！」

生産性下げるのはつまらないでしょ」

「そういうところはロシア的だよね…事前の策だって大事だよ」

「その策とやらが主従逆転してなければいいと思うけれどね」

凶星をさされる。その通り、仕事は口実で、狙いは正体不明のキーパーソンだ。バツが悪そうに頭をかいて呟く吾華音。

「うー…わかった。ここまでにしよう」

アンジェリカは小さく微笑んで、ブランデーの小瓶から吾華音のココアにひとしずく、ふたしずく。それを吾華音が一気にあおる。

「ごちそうさま、よし、今日は寝る！」

「お風呂朝でもいいけど、歯磨きはした方がいいよ。おやすみ」

マグカップを持ったアンジェリカがそう言って部屋を出る。

「うん、おやすみ…」

きっちり1分後。アンジェリカがドアの向こうから呟いた。

「だから今日は休もうと…」

「うわあ！」

タブレットのスリープを解除しようとしていた吾華音の手が止まった。

※4：作成したソースコードが、主に利益でなく全体の発展への貢献意図で無償公開されている状態。扱いについては許諾内容の文書が付属しており、それに従う範囲で利用できる。

…

翌日。

早朝のうちにスターライト学園を訪れ、寮で眠っている新のほつぺたをフニフニしてエネルギーをチャージした吾華音は、オーダーがあった8楽曲のデータを一発録り。すぐに担当アイドルを呼び出して確認作業に。

中等部向けが多く、スタライで曲を任される程度に優秀な生徒たちだったので、本番用のステージデータのフィッティングも済み、残すは今回最重要タスクだけとなった。曲は「夢のレセプション」。

「う…わあ…流石美月さん…」

「これって美月さんは一発録りなんですか？」

神崎美月の表現力豊かな歌唱・振りに、星宮いちご・霧矢あおい両名が目を丸くしている。

「そうなんだよ凄いよね、って言った方が面白いけど、美月結構ムキになっててね。実はこれ6テイク目。私が提示したサンプルの内容は2テイク目でできてて、そっちは若干簡単。いちごちゃん、どうする？」

「うーん…実はこの後予定があるので、今日は詰められない気もするんですが…」

「その口ぶりだとやるでOKかな。私も予定あるけど付き合うよ」

「ありがとうございます！」

「って、美月さんで2テイクかかったんですか…召苗先ば…じゃない、先生、相変わらずですね」

ソレイユではこと旧知である紫吹蘭が言う。ちょっと照れくさそうに応える吾華音。

「先輩でいいって！…私はステージに立つことを意識しないでやってるから楽なんだ。緊張の度合いが違う。勿論、ある程度緊張してた方がいい人もいるけどね」

「私、こういうリハ※5じゃなくても、美月さん、って思うとまだやっぱり緊張して、ちょっとうまくいなくて…」

「それは美月も同じだと思うよ。相手がみくるちゃんなら1テイク余裕だったんじゃないかな。今はいちごちゃんが目標にされてるんだから」

「う、頑張ります…」

難しい顔をした現トップアイドルは、きっちり6回目でOKを出した。

※5：リハーサルの略。ステージを作成→デモンストレーターのデータ作成→デモデータ(現在のレコーディングで言うデモテープ的扱い)合わせでリハーサルを行い、そのデータを検証→本番へ、という流れでアイカツシステムのステージは作られる。

勿論、リハなし本番やより綿密にリハを重ねた上でバーチャルカメラ映像をさらにミックスしてPV作成など、システムの使われ方は多岐にわたる。

この場合は吾華音のデモデータが2人ぶん存在し、リードである神崎のリハーサルデータを収録し、吾華音のデモの神崎部分と置き換えたもので星宮のリハーサルを行なっている。

「いちごちゃんお疲れ様。みんなこの後って？」

「あ、ソレイユ全員で、花音さんのライブに行くんです」

「おや、奇遇。私もなんだ。涼川先生も一緒だよ」

「微妙に穏やかじゃない…」

「あおいちゃんそこは探ってはいけないのだ…そうだね、みんな一緒に行く？車回そうか」

「いいんですか？助かります」

「先生の引率なら学園長もダメとは言わないと思うから。ちょっと待つ

てね」

…

1時間ほど後。

「私はTV TKYの駐車場に車置いてくるから、先に席取っという。あとデュベルと唐揚げ盛り合わせオーダーしという！」

自宅から吾華音のメルセデス・スプリンターを持ってきて、そのままドライバーを務めたアンジェリカが楽しみでしようがないという顔をして吾華音に言った。ありがとうございますの言葉が降りた面々からアンジェリカに。

「新ちゃん、私服姿穏やかじゃない♪」

「あ、ありがとうございます…アンジェリカさんの仕立てなんです」

「あおいちゃんその写真後で頂戴！」

「召苗、ちょっと急いだ方がよくないか？客が入ってからじゃ話聞きづらいだろ」

「あ、そうだった…ちょっと先行きます、新、席取っという」

「心配ない、星宮たちとは離れてるけど、リザーブ入ってるから。ほら、急げ」

「涼川先生すいません！お先します！」

駆け出す吾華音。

一方、TV TKYのマイクロバス駐車場に車を置いたアンジェリカの前を、見覚えのある車が通っていく。外交官ナンバーつきのNSX。

(いつもながら目立つ車だねえアーヤ。TKYで仕事かな)

その視線に気づいたかのように、静かに静止する紅い車体。左のドアが開き、サイドシルに手が乗るのが見えるや、身体をくるりと回してアリーシャが顔を出した。

「アン姉さんひっさしぶりー！あれ？1人？スプリンターあるならアカネもいるよね？」(ロシア語で)

「車に刺さってないで降りて話さない、アーヤ。その前にそこ、邪魔だから車どかす！ほら！」(ロシア語で)

「そんな怖い顔しない♪ビールは逃げないよ？」(ロシア語で)

(あれ、どうしてアーヤがそれ知って…)

怪訝そうな顔をするアンジェリカ。その反対側のドアからよいしょ、と車を降りるのに難儀する声が聞こえた。聞き覚えがある。立ち上がりドアを閉めるスーツ姿の女性。

「…なるほど、あなたでしたか」(日本語で)

「吾華音ちゃんはまだもうお店かな？…ありがとうございますアリーシャ先生、車を置いて…ってええ！？」

同様に車を降りたアリーシャ。車だけがするすると動き出し、駐車動作に入っている。

「フフフ。タルコフスキー家特装車をナメてもらっては」

ドヤ顔で言うアリーシャの言葉を遮ってアンジェリカが言う。

「…口止めの理由を聞かせて頂けるんでしょうか、吾華音が探していた件、お耳に入っていると思うのですが。『ティアラ学園長』」

少し厳しい顔で言うアンジェリカ。

「何のことかしら？…なーんて。勿論、ちゃんと話すために来たの。夢咲ティアラでなく、涼川ティアラとして」

笑顔からふいに真面目な顔になって言う、ドリームアカデミー学園長・そして現ASDC主宰、夢咲ティアラ。

「それなら早く…！」

急かすアンジェリカをティアラ学園長がたしなめる。

「落ち着いて。確かめておきたい事があるの。だから少しゆっくり行きましょう」

「学園長なんかうれしそー。大丈夫だよアン姉さん、アカネ、珍しく頑張ってたでしょ？よくわかんないけど、きっと平気」

「アーヤ…知ったような口をおおお」(ロシア語で)

「いだいいだいなんでー！！」(ロシア語で)

アリーシャのこめかみをぐりぐりした後、大きく溜息をつくアンジェリカ。

「…わかりました、じゃあデュベルは我慢して、私はティアラさんの後ろを歩くとします」

観念した顔のアンジェリカ。一方、ティアラ学園長は突然目を輝かせる。

「そうか、アンジェリカさんは飲めるクチなのよね！ビールが好きな？オススメがあるのよ！おつまみ共々奢らせてもらおうわ！」

アンジェリカの瞳も輝く。ティアラ学園長の両手を握って…

「本当ですか！？ありがとうございます！ティアラお姉様！！」

「アンジェリカちゃん！」

往来でひしと抱き合う綺麗所2人に視線が注がれる。珍しく回ってきたツッコミ役にアリーシャは一言だけ。

「ダメだこいつら、早くなんとかしないと」(流暢すぎる日本語で)

以降この2人はすっかり飲み友達になるのだが、それはまた別な話。

その頃、ライブハウス『プルミエ・ブラン』に着いた吾華音は。